

---

# 視線の先

梓

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

視線の先

### 【Nコード】

N5751B

### 【作者名】

梓

### 【あらすじ】

「もしも今、尋が振り向いたなら私は尋に告白する」ほのぼの系を目指した恋愛小説です。かなり短いです。

私の視線の先には、あなたの後姿。

私の前の席に座っているのは、柏木尋かしわぎひろという名前の男子である。

彼は私の片思いの相手であり、幼馴染でもある。

私は今日、ある決意を固めてきた。

そして、席に座って願掛けをした。

今日、もし今尋が振り返ったら私は……。

縋るような思いで、じっと尋の背中を見つめる。

数分が経過して、私はふうっとため息をついた。

まあ、無理だとは思ってたけど……。

思わず涙が溢れそうになる。

願掛けなんかしないと告白ができない自分の弱さが悲しくて、悔しかった。

顔を伏せようとすると、ふと彼の手が自分の肩に伸びた。

何かを本能的に察知したのか、ちょうど私が見ていた辺りをポリポリと掻いている。

そして次の瞬間

「麻衣？」

尋が振り返った。

端整な彼の顔。

すべてのパーツが綺麗で、女の私が嫉妬してしまいそう。

唇さえも計算されて作られたかのように美しい。

その唇から紡がれたのは確かに私の名前だった。

「な．．．に．．．？」

思わず声が震えるのを私は堪え切れなかった。

でも、それに尋が気づいた様子はない。

「お前、何か言った？」

「言っていない、よ．．．」

「そっか．．．なんか麻衣に呼ばれたような気がしたんだけど」

「呼んでないよ」

「ま、いいけど」

再び前を向こうとする尋に焦って、私は声をかけた。

「ひ、尋っ!!」

「ん？」

「きよ、今日の放課後さ!ちょっと教室で待っててよ!」

授業中だから、と必死に声を抑えようとするけれど、この上擦った声は抑えられなかった。

「え?それって・・・」

ぽつと色白な彼の頬に紅が灯る。

それに反応して思わず私の頬も赤くなる。

「い、いいから前見て!!」

それを見られたくなくて、尋の背中を押す。

「お、おう・・・」

きつと林檎のように赤い私の顔。

そんな私の視線の先には耳まで真っ赤な愛しいあなた。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5751b/>

---

視線の先

2010年11月24日16時02分発行